

普遍同質国家としてのラテン帝国について

坂 井 礼 文

〈Résumé〉

Cet article traite de la question de l'“Empire latin”, développée par Kojève, par ailleurs connu comme le philosophe qui a conçu une théorie de l'Etat universel et homogène. Dans la mesure où Kojève pensait que les intellectuels devaient servir de “médiateurs” entre les philosophes et les politiciens, il s'est lui-même comporté non seulement comme philosophe mais également comme intellectuel dans le but de changer le monde. En tant que haut fonctionnaire en France, il a ainsi suggéré à son supérieur qu'il serait souhaitable que la France, l'Espagne et l'Italie constituent un “Empire latin” à la fin de la guerre en 1945.

Tandis que la notion de l'Etat universel et homogène, déduite de la philosophie hégélienne par Kojève, présente un caractère abstrait, c'est sous la forme plus concrète et réalisable d'un tel “Empire latin” que Kojève a transformé la première. Si sa proposition n'a finalement pas été retenue, il n'en demeure pas moins qu'à travers elle, nous pouvons apercevoir l'horizon dans lequel se mêlent la philosophie et la politique chez Kojève.

はじめに

本稿では、「普遍同質国家」の理論を構築した哲学者として知られるコジェーヴの「ラテン帝国」論を取り上げる。彼は第二次世界大戦直後に執筆した「フランスの政治についてのドクトリン素描 *Esquisse d'une doctrine de la politique française*¹⁾」(1945年8月27日執筆, 未邦訳, 以下「素描」)の中でラテン帝国論を展開した。1937年に彼はフランスに帰化しており, それ以降ロシア風のコジェーヴニコフ (Kojevnikov)ではなく, フランス風のコジェーヴ (Kojève)と名乗るようになるにつれ, フランス人としてのアイデンティティを滋養しつつ, 自らの思想を形成していく。1939年から1940年にかけて, コジェーヴはフランス政府の下で戦争に動員された後, 1944年にレジスタンスにも参加しており, その際に命を落としそうになったことがある。その後, コジェーヴは1945年からフランス政府のために働いていた。このように彼はもはやロシア人としてではなく, フランス人として戦時中を過ごしていた折に, 「素描」を書いたのである。彼は, ある種の「歴史の終わり」である大戦後において, フランスがアングロ・サクソン中心の連合国家の一員となり果てることで, その独自の文化及び伝統を喪失してしまうことを危惧していた。

コジェーヴは, ラテン帝国論を書く際に, それを内容ごとに区分して体系的に描き出そうとはしなかった。ここからはまず, コジェーヴがいかなる哲学的背景に基づいてラテン帝国論を書いたか論じたうえで, 彼が提唱した帝国について宗教的・精神的・戦略的観点を軸にして考察する。

(1) 議論の背景

編集者の区分によると、「素描」は「歴史的情勢 *La situation historique*」, 「フランスの情勢 *La situation de la France*」, 「ラテン帝国の構想 *L'Idee de l'Empire latin*」という三節から構成されている。ここで、各節で取り扱われている論点を筆者なりに整理したい。第一節「歴史的情勢」では、以下のことが論じられている。第二次世界大戦終了直後という時期は、中世末期以来の大きな歴史的転換点に位置しており、ソ連とアングロ・サクソン帝国という二つの帝国が今後の世界情勢を牛耳っていかうとしている。そのような情勢下において、フランスの衰退は免れない運命にある。したがって、もはや国家は国民国家という形態ではなく、帝国というより大きな集合としてしか存続し得ない。第二節「フランスの情勢」では、フランスが衰退してしまう理由として、革命によって構築された国民国家という時代遅れのイデオロギーに固執することが説明されている。第三節「ラテン帝国の構想」では、類似の国民 (*nations apparentées*) によって形成される超-国民的政治的集合 (*unités politiques trans-nationales*) という「帝国」の時代にあつて²⁾、フランスの地位低下を避けるために、フランスと同様の国民性を有する周辺のラテン諸国を取り込むことの必要性が力説されている。

ラテン帝国について論ずる前に、そもそもコジェーヴが念頭に置いていた帝国が意味するのは、一部の民族が他の民族を排他的に支配する国家などではなく、理論的に言えば、ヘーゲル哲学を敷衍することで導き出されたとされる普遍同質国家 (*l'Etat universel et homogène*) であることを確認しておきたい。ヘーゲルに関する講義の中で、すでにコジェーヴは、真理へと到達した哲学者である「賢者は、必然的に普遍的 (すなわちそれ以上拡大不可能な) で同質的な (すなわちそれ以上変貌不可能な) 国家の市民でなければならない」³⁾ と述べており、このような国家観を終生持ち続けていたと、ひとまずは推測される。ヘーゲルは欲望の体系である市民社会を超克するために国家の役割を強調したものの、普遍同質国家を提唱していたという事実はないことから、この発想はコジェーヴの独創であると言えよう。

ドイツ臨時政府が無条件降伏を受け入れるのが1945年の5月7日であったことから、コジェーヴはそのおよそ4か月後に書いた「素描」の中で、同僚であるフランスの官僚らに向けて、戦争直後のフランス及び周辺国の関係構築について自身の見解を表明した。「素描」のフランス語版の編者の意見では、コジェーヴはそれをド・ゴールの側近、とりわけ対外経済関係局の局長であるロベール・マルジョランに向けて書いたと推測されている。あまり知られていないが、コジェーヴは熱心なド・ゴール主義者であった⁴⁾。彼は「素描」を出版しようと考えてはいなかったが、我々にとっては、彼の国家論を伺い知るうえで重要な文献であると言える。「素描」の文体に関して言えば、コジェーヴは其中で哲学用語を交えつつ政治的提言をしていることから、彼が首尾一貫した哲学的思考に基づいてそれを書いたことが伺える。

「素描」の内容は、現在でも欧米において取り上げられることがあるが、そこでは主に政治学的、歴史的アプローチから考察されることが多い⁵⁾。いみじくもフランスの保守系の政治学者アラン・ド・ブノワが指摘しているように、コジェーヴのラテン帝国論は民主制と帝国の原理を適

切に組み合わせたものであり、現在の欧州連合のような超国家的経済統合ではなく、連邦制という形で帝国の存在様式を描き出したものとして再評価されるべきであろう⁶⁾。

ところで、論文「僭主政治と知恵 Tyrannie et sagesse」の中で、コジェーヴはソクラテスを例にとって、哲学者が「文人共和国 République des lettres」, 「リュケイオン lycées」⁷⁾, 「庭園 jardins」, 「アカデミー académies」と言われる狭いサークルに「隠遁」するのではなく、積極的に政治に関わらなくてはならないと主張している。なぜならば、そのような「隠遁生活」には、同様の教義を持つ者のみが集まっているため、「主観的確信」としての偏見が充満しており、哲学者はこのような偏見から逃れる必要があるからである。

あるひとつの教義を採用するすべての閉鎖社会、あるひとつの教義で教育するという見地から選ばれたすべての「エリート」は、その教義に由来する偏見を強化する傾向がある。偏見を退ける哲学者は、それゆえ「共和的」であろうが「貴族的」であろうが、いかなるものであっても「隠遁生活」ではなく、広い世界に（ソクラテスのように「広場」ないし「路上」に）生きようとしなければならないのである⁸⁾。

このことから明らかであるように、コジェーヴ自身も「アカデミー」を後にして、現実の政治へと提言をする必要があると考えていたものと推測される。そのことにより、哲学者は「エリート」としてノブレス・オブリージュを果たすべく、社会を正しい方向へと唱導するという目的を果たすことも有意義ではあるが、それよりもさらに重要な目的として、彼はその政治的行動を通じて、自らの哲学の正当性を証明しなければならないのである。

真理を開示するために哲学者は、歴史に「参加」しなければならないのであり、また、哲学者としてのかれは、どの「哲学的素養のない者」よりもうまく統治することができる以上、たとえば僭主に助言することによって、なぜ歴史に積極的に参加してはいけないのか、その理由は明らかではない⁹⁾。

コジェーヴの考えでは、哲学者とは定義上真理を探究するための研究活動に可能な限り多くの時間を割こうとする者であるために、あえて政治家となることを欲しないが、政治家の助言者として提言をすべきでもある。したがって、コジェーヴは上司であるマルジョランを通じて、ド・ゴールに意見書の内容を受け入れてもらうことを目論んでいたであろう。コジェーヴがその内容を、広く一般に向けて出版することに対して全く興味を持っていなかったことの理由も、このことから納得が行く。また、哲学者であるよりも知識人としてコジェーヴは、僭主君主であったとも言われるド・ゴールに対して助言を与えることを自らの使命であるとすら考えていたことが次の文章から読みとれる。

哲学者たちが、理論面で、かれの哲学的理念と政治的現実とのあいだに一致をもたらす責任を、さまざまな違いを持つ（多かれ少なかれ時間と空間のなかに広がっている）知識人たちに託しているのは正しいことである。知識人たちがこの仕事に専念すること、そして彼らが理論の中で、現在の政治的事柄によって引き起こされた具体的な問題の水準にまで到達した場合には、専制君主に直接に助言を与えることは共に正しいことである¹⁰⁾。

以上のことから、コジエーヴはサルトルが主張したアンガージュマンを、独自の手法で実行した人物であると評することができよう。さらに、その行動の根拠はソクラテスに由来する伝統に基づくものとされている。当然ながら、コジエーヴにおけるアンガージュマンとは、哲学者として単に政治的・社会的運動に関わるのではなく、自身の哲学に裏打ちされた国家論に基づいた行動のことなのである。それでは、その国家論の中身に触れていきたい。

「素描」の中では、やがて到来しうる普遍同質国家の実現に先駆けたラテン帝国の構想が語られている。コジエーヴがラテン帝国を提唱するにあたって念頭に置いていた帝国とは、かつて歴史上存在した「皇帝の強力統治の下にある多民族国家、単一王国を越えた超域連合、メトロポールと従属地からなる支配－被支配のシステム、あるいは近隣諸国に独善的支配権を振う超大国」¹¹⁾であると理解するべきではない。とりわけ、コジエーヴが、かつての帝国と同様に、ラテン帝国もまたナポレオンに典型的に見られる軍事的英雄としてのカリスマ的指導者によって、武力をもって築かれるべきであると考えていなかったことは、留意しておく必要がある。そもそも、コジエーヴは軍勢力を背景にした抑圧的指導者に対して警戒していたことが、「素描」からも明らかである。例えば、「素描」の中の未編集の頁にある「即座になすべき段取り *Démarches à faire immédiatement*」において、その第一段階として、「フランスは、他のラテン諸国と協力して、フランコ政権の転覆の試みに指導的立場を持って取りかかるべきであろう」¹²⁾と書かれている。筆者は、フランス国立図書館（BNF）に寄贈されているコジエーヴの遺稿の中の BOITE XIII の 62 頁で、「即座になすべき段取り」を閲覧した。

帝国という表現が今見たような誤解を与えうる危険なものであったがゆえに、コジエーヴは元々「普遍国家」という表現を好んで用いていたことをここで示しておきたい。（ただ、「ラテン普遍国家」などという冗長な言い方をコジエーヴがしなかったことは不思議なことではない。）「僭主政治と知恵」の中で、コジエーヴは、普遍同質国家へと至る試みとして、歴史を遡れば、アリストテレスの弟子であったアレクサンドロスが築き上げた帝国を見出すことができると論じている。その帝国の特徴として、地理的・民族的境界を持っておらず、中心となる都市がないということが挙げられることから、それはむしろ普遍国家であったと言った方がより適切である。

ギリシャにおける彼以前のすべての支配者たち、および同時代の人びとの政治的行動と区別される、アレクサンドロスの政治的行動の特徴は、それが帝国の理念によって導かれていることであるが、少なくとも、この帝国はア・プリオリに与えられた（地理的、民族的、その

他の)境界をもたず、あらかじめ決められた「首都」もなく、また、その周辺に対して政治的支配を行使するために定められた地理的・民族的に固定された中心を持っていなかったという意味で、普遍国家であった¹³⁾。

つまり、アレクサンドロス帝国はただ一つの民族あるいは社会的階層のみに基づかないという点で、他の征服者たちが築き上げようとしていた国家と一線を画していた。しかしながら、その帝国に生きる人民は未だに同質的でないため、そこで「無階級社会」が実現されていたとは言えない。同質国家が作られるためには、聖パウロの教義に従って、「同一の神を信仰するすべての人々の間の根本的な平等」¹⁴⁾の理念が採用されなくてはならない。

(2) 宗教的観点

ラテン帝国に話を戻そう。コジェーヴは基本的には宗教、特にキリスト教を基盤としてラテン帝国が作られていくと想定した¹⁵⁾。彼はラテン的な類似性がすでにして潜在的な帝国であると述べた文脈で、以下のように続けている。

そして、ラテン的統合性は、カトリック教会という統合性において、またそれによって、すでにある程度まで現実化され、実現されていることを忘れてはならない。ところで、宗教的及び(「聖職者の」側面とは明確に区別される)教會的側面は、今日において全く無視できない¹⁶⁾。

ここでコジェーヴが考察の対象としているキリスト教は、誰であっても信仰することが可能であるため、それは人種と直接的に関係がないことから、人種主義の偏狭さがもたらした失敗を繰り返さずにすむ、と我々は彼の意見に従って考える¹⁷⁾。コジェーヴはキリスト教を起源に持つ西洋文明を教派に基づいて三つに分類し、それぞれに対応する帝国が形成されうると推論した。三つの宗派とは、プロテスタント教会、東方正教会及びカトリック教会である。

第一に、プロテスタンティズムを信仰する民族によって形成されたプロテスタント教会は、カトリック教会ほど全体を統合する力に欠けている側面はあるものの、アメリカやイギリスなどのアングロ・サクソンの国家を中心として多くの信者を持つ。そして、この教会はアングロ・サクソン世界だけでなく、ドイツのようなゲルマン民族を中心として作られた国家をも取り込むことができる。

第二に、東方正教会はロシアを中心に信者を持つが、ロシアが「スラヴォ・ソヴィエト帝国」(通常の用語で言えばソヴィエト連邦)へと移行する過程において、この教会とこの帝国は世界に対する影響力をより堅固なものにしつつある。

第三に、カトリック教会はフランスやイタリア、スペイン、ポルトガルとその植民地を中心に信者を持つが、それに対応する帝国は、他の二つと異なり、未だに形成されていない。したがっ

て、コジェーヴは、フランスが帝国の一員となるために、カトリックを基盤に置いた「ラテン文化」を議論の俎上に上げることで、スペインやイタリアを含めたラテン帝国の創設を主張したのである¹⁸⁾。

「政教条約 Concordat」のような国家と教会との間での取り決めではなく、国家と教会との間での緻密な連携に沿って、ラテン帝国の計画が実現されることが望ましいとコジェーヴは考えた。そうすれば、カトリック教会は普遍性の理念に基づいて、人的資本を一つにまとめ上げることができよう。カトリック教会は、ラテン帝国がかつてのような帝国主義へと暴走しないように、歯止めの役割を果たさなくてはならない。ここで提唱されている帝国とは、いわゆる過去の帝国主義的国家のように、軍事力により領土を拡張しようと欲するわけではないため、それはいわば「帝国主義なき帝国」（すなわち、武略を背景とした威嚇あるいは攻撃以外の仕方でも成立した連邦）のことを意味している。コジェーヴの文章を引用しよう。

それ〔カトリック教会〕は、国民が自国の境界線に固執しつつ、境界線をずらすために戦争に向かったのと同様に、帝国が自国の境界線に固執しないよう、警戒を促さなければならないだろう。要するに、それ〔カトリック教会〕がけっして「帝国主義的 impérialiste」となることなく帝國的 impériale であることを可能にしてくれるのは、ラテン思想のカトリシズムであり、そこから全てのことが派生する¹⁹⁾。

(3) 精神的観点

次に、ラテン帝国に関して戦略的観点から考察したい。フランスや、イタリア、スペインなどを含む「ラテン連合」が、教会を通じてすでにある程度まで形成されていることは、好都合である。というのも、信仰の共有によって、人々の間で言語の類似性だけではなく、文明、「雰囲気 climat」、「気質 mentalité」の類似性が促進されてきたからである。そこで、次に問題となってくるのは、ラテン気質の類似性である。

ここでいうラテン気質とは何を指しているのであるのであろうか。興味深いことに、コジェーヴは「生の甘美さ」をその精神性の本質に挙げている。ラテン人の気質を論じた文章の中で、彼は次のように述べる。

むしろ、この気質を定義付けることは困難であるが、それが深い連帯において他に類を見ないと即座に認められる。この気質は、余暇の過ごし方によって、また「生の甘美さ」を作り出す素質によって、さらに「無為の楽しみ」によって、それが特異性を持つという点で特徴付けられるように思われる。この余暇の過ごし方は芸術一般の源である。この「生の甘美さ」は物質的な快適さと全く関係がない。この「無為の楽しみ」は、仮に生産的で実り豊かな労働の後に来るものでなければ、単なる怠惰へと墮する。（そもそも、ラテン帝国は、自らが存在するという事実によってのみ、このような労働を生み出すことであらう。）²⁰⁾

ここで、物質的な快適さを追求する文化として、コジェーヴが想定しているのはアングロ・サクソン文化である。快適さをもたらしてくれるテクノロジーの発展に寄与するために働くのではなく、あえて何もしないことによって時間を過ごすことがラテン文化の特質であると彼は考えている。こうした観点は、コジェーヴがアングロ・サクソン文化に対して批判を行ったことのみならず、彼が『ヘーゲル読解入門』の第二版（1968）の注の中で、アメリカ的な歴史の終わりを退け、日本的な歴史の終わりを主張するに至ったこととも深く関連していると思われる²¹⁾。

(4) 戦略的観点

最後に、戦略的観点からコジェーヴの帝国論を解明したい。コジェーヴの意見では、歴史的に見て、封建領土から国民国家へと移行がなされ、さらに国民国家から帝国への移行がなされるべきなのである。その歴史的過程の背景には、経済的及び政治的要因ばかりではなく、戦略的要因があるとされる。この戦略的要因に関するコジェーヴの説明は、武器の発展の歴史に基づいたものであり、非常に説得力があるように思われる。

中世において、都市を中心として構成されていた領域は、近代になって国民国家という空間へと移行した。中世のこのような準国家体制は、火器によって粉碎された。剣と槍では、火器に文字通り太刀打ちできないのであり、火器を共同で持たなくてはならない。それゆえに、国民国家という、より広い集合体の創設が要請されたのである。

次に、ハンドガン、マシンガン、カノン砲は、現代的な空軍の前では無力であったため、今度は空軍を共同で所有することが要請された。おそらくこの時期のことにに関して、コジェーヴからカール・シュミットに宛てた 1955 年 5 月 16 日の手紙の中では、戦略的な意味において「陸と海 Land und Meer」が「空 Luft」に止揚されたと書かれている²²⁾。この際に、帝国という、より広い集合体を築くことが今度は必要となる。コジェーヴが国民国家と帝国の関係をどのように考えていたか知るべく、先の「素描」から引用しよう。

現在では、これらの国民国家こそが、不可避免的に、「諸帝国」という言葉で示すことができるような、国民の枠組みを乗り越える政治的な構成体へと次第に場を譲るのである。19 世紀にはまだ絶大な力を誇っていた国民国家は、中世の男爵領や都市や大司教区が国家であることをやめたのと同様に、政治的実体、強い意味での国家であることをやめるのである。政治的に持続するために、現代国家は協約を結んだ国民の「帝國的な」広い連帯に基づかなくてはならない。現代国家は一つの帝国である限りにおいてのみ本当の意味で国家である²³⁾。

ここでいう「強い意味での国家」とは、戦争を独自の決断のみで遂行できる単位としての国家であると考えられる。コジェーヴはカール・シュミットに宛てた 1955 年 5 月 16 日の手紙の中で、国家とは「戦争を行う領土的単位 kriegführende territorial Einheit」²⁴⁾ であると書いている。

過去においては、このような国家には存在意義があったが、それは今ではもはや維持し続ける

ことはできない。中世から近代へと時代が変遷する過程において、それら自体が個別の国家であった都市、貴族や教会の所有地は、国民国家の創設の必要性から、解体されねばならなかったが、第二次世界大戦後の現在もそれと似たような状況にある。このように、いくつかの国民国家が統合することで一つの帝国を構成する必要がある、またそうすることでしか、国家は維持できないとコジェーヴは考えている。

彼は明言していないが、この論理は、ヘーゲルが社会という枠組みを維持するために、国家という、社会より上位にある集合体を持ち出した論理と類似している。社会は中産階級によって構成されており、彼らは自由な経済活動を求めたが、それだけでは無秩序になってしまう。そこで、国家が空間を支配することによって規律を保つ必要があった。社会は国家に止揚されることによってのみ維持されるのである。ヘーゲルが生きていた時代には、この解決策が一定の説得力を持っていたが、コジェーヴが生きていた時代には、新たな解決策を見出さなくてはならなかったように思われ、その解決策としてラテン帝国の創設を彼は説いたのであろう。このラテン帝国は、普遍同質国家へと至る道程で要請される。

「素描」が書かれた時点ではまだ、コジェーヴは歴史の終焉時において登場する国家が、具体的にどの国であるか挙げてはいない。1943年に書かれた『法の現象学』の中では、彼は「普遍同質国家において、すなわち社会主義帝国において」²⁵⁾ と言い換えており、そこには所有者は存在せず、したがって所有者同士の行為によって成立する経済社会すらも存在しないことになると述べている。

その後、1950年9月19日にレオ・シュトラウスへと宛てた手紙の中で、ポスト歴史の国家について、コジェーヴは以下のように書いている。

もしも西洋人が資本主義者であり（すなわち、ナショナリストでもあり）つづけるならば、彼らはロシアに打ち負かされるだろう、そして、このようにして最終—国家が誕生するのだ。しかしながら、もし彼らが彼らの経済および政策を「統合」するならば（彼らはそれをやりつつある）、その場合には、西洋人がロシアを打ち負かすことになる。そして、このようにして最終—国家に行き着くことになるだろう（同一の the same 普遍同質国家）²⁶⁾。

ここでは、コジェーヴは最終国家を体现するのが西側諸国かロシアであるか躊躇しているが、いずれにしても長期的に見れば普遍同質国家が成立するであろうとの見解を示しており、社会主義及び資本主義の統合の可能性を示唆している。

おわりに

本稿で詳説することはできなかったが、コジェーヴの哲学はキリスト教を独自の「無神論的」視座から脱構築しながら展開されたものである。「帝国主義なき帝国」であるとされたラテン帝国の宗教的観点に関して言えば、そこではカトリック教会が国境線を変えるための無益な戦いを

抑制する任務を負っている。このように、この帝国の背景において、軍事力及びキリスト教が果たす役割を軽視してはならないであろう。コジェーヴの議論に従えば、キリスト教の宗派をプロテスタント教会、カトリック教会、東方正教会という三つに分けるべきであり、それぞれの教会に対して対応する民族が見られることに着目しなくてはならない。この点で、コジェーヴの国家論はキリスト教と深い親和性を持っている。

精神的観点に関して述べると、ラテン帝国はアングロ・サクソンの技術の向上を背景とした快楽主義に抗する「無為の楽しみ」によって支えられている。この観点は、アメリカ文化が世界中に浸透している現代を生きる我々にとって興味深い。

戦略的観点から言えば、都市国家から国民国家、そして帝国への移行という歴史の流れは必然的である。なぜならば、武器の性能の向上により、かつてより大きな共同体により国家を防衛する必要があることは抗えない事実だからである。

最後になるが、コジェーヴは知識人が哲学者と政治家の間の「媒介者」として為政者に助言を与える役割を果たすべきであると考えていたことをいま一度想起しておきたい。彼自身が哲学者であったばかりではなく、知識人として世界を変革するために行動していたことが本稿の内容から伺えるであろう。ヘーゲル哲学から演繹されたとされる普遍同質国家の理念は抽象的な性格を持つものの、コジェーヴはそれをより具体的かつ実現可能な政策として政府に提案する際に、ラテン帝国論を唱えたのであった。彼の提案は受け入れられることこそなかったとはいえ、我々はその提案内容から、コジェーヴにおいて哲学と政治が交錯する地平を垣間見ることができる。

注

- 1) 1990年に *La règle du jeu* という雑誌に編集版が所収され、2007年には *Hommage à Alexandre Kojève* というフランス国立図書館 (BNF) が編纂した雑誌に別の編集版が掲載された。完全版である英語版も存在する。BNFにはフランス語による完全版が所蔵されている。これらを全て適宜参照した。
- 2) Kojève, « Esquisse d'une doctrine de la politique française », in *Hommage à Alexandre Kojève*, p. 93.
- 3) Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel*, p. 289. (『ヘーゲル読解入門』156頁。) 以下、この本から引用する際には ILH の略号と共に頁数を示す。
- 4) 2011年秋から2012年夏にかけて三度にわたって行った、コジェーヴの姪クーズネットゾフとの個人的なインタビューによる。
- 5) Cf. Robert Howse, "Kojève's Latin Empire", *Policy Review*, Hoover Institution Stanford University.
- 6) Alain De Benoist, "The Idea of Empire", *Telos*, pp. 81-98. フランス語版は未編集のため、英語版を参照した。
- 7) 元々この語はアテネの近くにあるアポロ・リュケイウス神殿付近にあった、城壁で囲まれた場所のことを指し、ひいてはアリストテレスがそこに創設した学園を意味していた。周知のように、現在では *lycée* はもっぱら高校を指す語として使われている。
- 8) Kojève, « Tyrannie et sagesse », in *De la tyrannie*, p. 173. (『僭主政治と知恵』『僭主政治について』)

て』下 44 頁。) 以下でこの本を参照する際には、DT の略号と共にページ数を併記する。

- 9) *Ibid.*, p. 170. (同上 下 40 頁。)
- 10) *Ibid.*, p. 198. (同上 下 78-9 頁。)
- 11) 山本有造『『帝国』とはなにか』『帝国の研究』3 頁。
- 12) “La France devrait se mettre à la tête d’une action entreprise en vue de renverser le Gouvernement Franco, en accord avec les autres pays latins.”
- 13) Kojève, « Tyrannie et sagesse », in DT, p. 191. (『僭主政治と知恵』『僭主政治について』下 69 頁。)
- 14) *Ibid.*, p. 193. (同上 下 72 頁。)
- 15) ここでは詳説することはできないが、彼の哲学自体がキリスト教を独自の「無神論的」視座から脱構築しながら展開されたものである。コジェーヴ哲学と宗教の関連については拙稿「コジェーヴの『無神論的』あるいは人間学的存在論——三位一体論の観点から」を参照。
- 16) Kojève, « Esquisse d’une doctrine de la politique française », in *Hommage à Alexandre Kojève*, p. 94.
- 17) 彼は日本がいずれ中国に政治的な意味で接近することになると考えていた。Cf. Dominique Auffret, *Alexandre Kojève*, p. 487. (『評伝アレクサンドル・コジェーヴ』504 頁。) おそらくその根拠にあるのは、仏教もキリスト教同様に人種を乗り越える普遍的性格を持つことにあるように我々には思われる。コジェーヴは必ずしも知日派であったとは言えないが、親日家であることは確かであり、二度来日したことが知られている。筆者が 2010-11 年に数回にわたり行ったコジェーヴの姪クーズネットゾフ氏との個人的なインタビューによると、コジェーヴは日本の文化がイギリスの文化よりも数段洗練されていると繰り返し語っていたという。
- 18) ラテン帝国の中にポルトガルも含めるべきであるように我々には思われるが、コジェーヴはなぜかあえてそうしなかった。コジェーヴは「僭主政治と知恵」の元となった論文「哲学者の政治的行動」を書いた 1950 年の時点で、スペインの悪名高き独裁者フランコとは異なり、ポルトガルの指導者サラザールこそ理想的な独裁者と考えていたにも関わらず、そうしなかった。Cf. Kojève, « Tyrannie et sagesse » in DT, p. 154. (『僭主政治と知恵』『僭主政治について』下 17 頁。)
- 19) Kojève, « Esquisse d’une doctrine de la politique française », *La règle du jeu*, p. 122. [] 内は執筆者の補足。
- 20) *Ibid.*, pp. 103-4.
- 21) 「(1948 年から 1958 年までの間に) 合衆国とソ連とを数回旅行し比較してみた結果、私はアメリカ人が豊かになった中国人やソヴィエト人のような印象を得たのだが、それはソヴィエト人や中国人がまだ貧乏な、だが急速に豊かになりつつあるアメリカ人でしかないからである。アメリカ的生活様式 (*American way of life*) はポスト歴史の時代に固有の生活様式であり、合衆国が現実世界に現前していることは、人類全体の『永遠に現在する』未来を予示するものであるとの結論に導かれていった。(中略)

私がこの点での意見を根本的に変えたのは、最近日本に旅行した(1959 年)後である。(中略)

最近日本と西洋世界との間に始まった相互交流は、結局、日本人を再び野蛮にするのではなく、(ロシア人をも含めた) 西洋人を『日本化する』ことに帰着するであろう」。(ILH, pp. 436-7. 邦訳 246 頁。)

- 22) *Schmittiana VI*, S. 105.
- 23) Kojève, « Esquisse d’une doctrine de la politique française », in *Hommage à Alexandre Kojève*, p. 88.

- 24) “Der Briefwechsel Kojève-Schmitt”, in *Schmittiana VI*, S. 104.
- 25) Kojève, *Esquisse d'une phénoménologie du droit*, p. 575. (『法の現象学』660頁。)
- 26) *On Tyranny*, p. 256. (邦訳 下212-3頁。)

参考文献

- Auffret, Dominique, *Alexandre Kojève*, Grasset & Fasquelle, 1990. (今野雅方訳『評伝アレクサンデル・コジェーヴ』パピルス 2001。)
- de Benoist, Alain, “The Idea of Empire”, *Telos*, Number 98-9, Winter 1993 – Fall 1994, pp. 81-98.
- Howse, Robert, “Kojève’s Latin Empire”, *Policy Review*, Hoover Institution Stanford University, 1 August 2004, archived from the original on 18 March 2008, <http://www.hoover.org/research/kojeves-latin-empire> (28 July 2015).
- Kojève, Alexandre, « L’Empire latin - Esquisse d’une doctrine de la politique française (1945) », *La règle du jeu*, 1990, pp. 89-123. Réédité in *Hommage à Alexandre Kojève*, 2007, pp. 86-98.
- , *Esquisse d'une phénoménologie du droit*, Gallimard, 1981. (今村仁司他訳『法の現象学』法政大学出版局 1996。)
- , (ILH), *Introduction à la lecture de Hegel*, Gallimard, 1947. (上妻精他訳『ヘーゲル読解入門』国文社 1987。)
- , “Kolonialismus in europäischer Sicht (1957)”, in Tommissen, Piet (Hg.), *Schmittiana VI*, Duncker & Humblot, 1998, S. 126-140. (« Capitalisme et socialisme », *Commentaire*, numéro 9, printemps 1980, pp. 135-137; « Du colonialisme au capitalisme donnant », *Commentaire*, numéro 87, 1999, pp. 557-565.)
- 坂井礼文「コジェーヴの『無神論的』あるいは人間学的存在論——三位一体論の観点から」(『アルケー』関西哲学会 2014。100-111頁。)
- Strauss, *On Tyranny*, edited by Victor Gourevitch and Michael S. Roth, The University of Chicago Press, 2000. (石崎嘉彦・飯島昇藏・金田耕一他訳『僭主政治について』現代思潮新社, 2007年。) この本に所収されているコジェーヴの論文「僭主政治と知恵 Tyrannie et sagesse」は、元々は英語ではなくフランス語で書かれていたことから、この論文を引用する際に限り、フランス語版 *De la tyrannie* (traduit par Hélène Kern, Gallimard, 1997) を用いて、DTの略号と共にページ数を併記した。
- 山本有造編『帝国の研究』名古屋大学出版会 2003。

* 訳文は原著に基づいて、必要に応じて改変を加えた。

